



「利用者三名に聞きました」

借楽荘べらりし 満喫しています



スタッフの笑顔に癒されてるのよ

野田 和子さん

現在、借楽荘での生活は四年目を迎えています。

毎週、市内のデイサービスに通っていて、「ただいま帰りました」と戻ってきたときに、「お帰りなさい」と受付や玄関付近にいる職員が誰かしら笑顔で声をかけてくれるのが嬉しいと開口一番におっしゃっていました。特に、借楽荘の職員の笑顔が素敵で、「外出表示札」があるワーカー室前に立ち寄り、「お帰りなさい」という声を聞くと、気持ちが悪されるとのこと。最近では、世の中が何か冷たい感じになってきているので、ここでの生活はとてもほっとするので、重ねて強調されていました。

「先日、夜中に雷雨があり、雷の音がものすごくあったのですが、建物がしっかりして



活の良さを次々に話してくださいました。クラブ活動では、ほとんどのものに参加していますが、さわやか体操はデイサービスに通うようになって、辞めたそうです。担当職員の説明が素敵なの！という

一番いいのは三食昼寝付き

角館 定男さん

借楽荘の魅力は何ですか？とお尋ねしたら、「三食昼寝付き」という言葉がすぐに返ってきました。今年の一月に入居ですから、借楽荘ぐらしはまだ半年足らずです。



奥様が特別養護老人ホーム白楽荘に入居されています。三年ほど前に、借楽荘のパンフレットを見て、入居の相談をされました。入居待ちの期間が予想よりも短くて済み、昨年の十一月ぐらいに年明けには入居できますよ、という連絡があり、急遽、自宅を片付け

て、ここに引っ越してきたとのことでした。入居前、奥様に面会に来たときに、施設の喫茶コーナーで借楽荘の方と一緒にいることが多く、顔見知りの方がいたのが、入居した時に助かった、と笑顔でおっしゃっていました。入居後、毎日、上の階にある白楽荘に奥様の面会に行っていました。新型コロナウイルス感染症予防のために、面会中止になったことを、とても残念がっていました。入居後も午後、お二人で喫茶コーナーでひとときを過ごすことも、借楽荘での生活の魅力でしたが、それも休止に。元のように、毎日、面会に出向くことができる日が、早く戻ってくるというですね。

食事については、利用者アンケートに「食べたことがないものばかりで、お腹がびっくりしています」と書いたと、おちゃめな表情になりました。一人で暮らしていると、同じようなものばかりになるし、本当においしいものを食べたいときは外食に。ここでは、メニューのバリエーションが豊富で、ボリュームもたっぷりなので、ご飯を少なめにしているにもかかわらず、お腹が出てきてしまったそうです。

「GOGO体操」や、地域からの参加者とおしゃべりしながら料理作りができる「わくわくキッチン」は、特に楽しかったそうです。

年間を通じては、季節のお祝い事の行事や食事が楽しめそうです。お正月のお屠蘇やおせち料理、お雑煮、節分の豆まきなど、昔、親にしてもらったときと同じような雰囲気があります。旬ご飯やグリーンピースの豆ご飯も思い出せる料理で、グリーンピースは小さいころ縁側で鞘から剥く手伝いをよくしたそうです。「うまく取り出せないで、庭にころっと落としてしまった豆は、拾い洗って、他の豆と一緒に食べたのよ、今は、わざわざ拾わないんじゃないかしらねえ」と、次々と懐かしい話を交えて、施設の行事や行事食、特別食について話してくださいました。特に、敬老の日の「祝賀会」の食事は豪華で、会場もにぎやかで、特別感が強く印象的だそうです。

借楽荘への入居は当初、お子さんたちからは反対されたそうです。親子でも気を遣って暮らすより、自由がいいと選んだ借楽荘での生活。ずっと暮らし続けられるように、がんばるわ、とのことでした。

入居後、間もなく新型コロナウイルス感染症予防対応で、クラブ活動や行事などが中止になってしまいました。そのため、まだクラブには入っていません。行事は、お雛祭りのときの「鮎の解体ショー」はよかったそうです。借楽荘ステイホームプロジェクトとして、体操の機会を増やしていますが、これには積極的に参加しているそうです。また、腰を痛めた後遺症があるため、リハビリにも通っているそうです。

体調を崩す前は、写真が趣味で、写真クラブに在籍し、ずっと作品を展示会に出していたと、たくさん写真を見せてくださいました。ジャンルは風景や花、ポートレートが得意で、特に、故郷である岩手県の八幡平周辺の風景が一番だと、お国自慢も。

六月の特別食は岩手県の郷土料理がテーマ。管理栄養士が九州出身で、岩手県の料理にはあまりなじみがないと聞き、ジャージャー麺と胡桃餅を取り寄せて、食べてもらうなど、ただサービスを受けるだけでなく、より積極的に借楽荘ライフを充実させるために動いていらっしゃいます。借楽荘期待の「新人」です。